

愛媛大学版プレFD科目「教授法入門」の実践と展望

上月 翔太

愛媛大学教育・学生支援機構

1. はじめに

本発表は、愛媛大学で2024年度より大学院の授業科目として正式開講されたプレFD科目「教授法入門—専門分野の学識を教授するために」の実践報告と今後の展望を述べるものである。

2019年の大学院設置基準の改正において、大学院生に対し、その「学識を教授するために必要な能力を培うための機会」の提供や、当該機会に関する情報の提供を行うことが努力義務とされた。こうした機会を入職前のFDとしてプレFDと総称する。

プレFDに関連する本学の動きについては以下の通りである。まず、第4期中期目標・中期計画において、「博士課程学生及びポストドクターがその後のキャリアで求められる教育能力を高める」ことが定められ、授業科目の設置や受講者満足度が指標とされている。また大学院生がその専門性を社会に活かすための汎用的能力である「愛大トランスファラブルスキル」が定められ、カリキュラム整備が進められている。加えて、大学設置基準の指導補助者に関する2022年の改正を受けて、上級TAであるGSI (Graduate Students Instructor) 制度が運用され、プレFD科目がGSIになるための研修とされている。

2. 「教授法入門」開発の経緯

「教授法入門」開講の経緯を以下に示す。

最初に、プレFDプログラムの先行事例の調査を行った。発表者自身、出身大学院でプレFDを受講したこともあり、基本的な内容や進め方について経験を有していたものの、さまざまな事例を知ることが重要と考え、SPOD (四国地区教職員能力開発ネットワーク) のFD専門部会のメン

バーとともに調査を行った。

次に2023年度に大学院生への研修として「教授法入門」の試行版を実施した。研修であるため、単位の認定は行われませんが、学内にどの程度の需要があるのか、学習の進め方などを検討することを目的とした。大学院生のみならず、ポストドクターや研究員も対象とし、幅広い参加を募った。結果的に受講者は3名であったが、オンデマンド学習の進め方、課題の出し方などを検討する材料を得ることができた。とりわけ、シラバス作成は思いのほか難しい課題であることが確認され、段階的なステップを踏むことやよりていねいに説明することが必要との示唆を得た。

以上の過程を経て、2024年度に一部研究科・学環で正式な授業科目として「教授法入門」が開講された。

3. 2024年度「教授法入門」の概要

2024年度に開講した「教授法入門」の概要を以下に示す。

シラバスに記載した到達目標は表1の通りである。到達目標については昨年度の試行版から大きな変更はしていない。

表1 「教授法入門」到達目標

-
- ・大学において指導や教育に携わる意義を説明することができる
 - ・授業設計と学習評価の基本を踏まえたシラバスを書くことができる
 - ・わかりやすい説明や学習者の活動を取り入れた授業を計画し実践できる
 - ・教育の倫理について自身を省察し意識した言動をとることができる
-

・異なる専門分野の大学院生と積極的にかかわりながら共に学び合うことに貢献できる

授業は全8回1単位である。前半部は、動画とLMSによるオンデマンド学習とし、対面授業は半日のみとした。研究活動との両立のしやすさと他の研究科・学環の大学院生との交流の双方を実現できることを念頭に、オンデマンド学習と半日の対面学習の組み合わせで実施した。表2にスケジュールと内容をまとめている。

表2 「教授法入門」 スケジュールと内容

オンデマンド学習 (2024.8.1-9.20)

- ・シラバスとは何か：シラバスの意義、留意点
- ・授業設計：コース設計の基本、クラス設計の基本
- ・学習評価：学習評価の基本、学習評価の実践例

- ・講義法：講義法とは、伝わる話し方
 - ・アクティブラーニング：アクティブラーニングとは、アクティブラーニングの実践例
 - ・教育者としての倫理：教育観、教育の倫理
 - ・模擬授業に向けて：導入・展開・まとめ
- 対面授業 (2024.9.20)

- ・シラバスの相互評価
 - ・模擬授業の実践
 - ・教育の倫理に関するディスカッション
 - ・まとめとふりかえり
-

ただし、オンデマンド学習のみでは、シラバス作成や模擬授業の準備に学習者が困難や不安を感じると考え、発表者は受講者全員と約1時間ずつ、学習に関する個人メンタリングを実施した。個人メンタリングの中では課題についての助言や相談のほか、受講動機などの簡単なヒアリングも行った。

4. 「教授法入門」の受講者層

今年度の受講者（大学院生のほか、研究員も含む）は8名であった。理学部、人文社会科学

研究科、医学系研究科、連合農学研究科と幅広い専門分野から受講生が集まった。修士課程（博士前期課程）が4名、博士課程（博士後期課程）が3名であった。7名中5名の大学院生が定職をもちながら学ぶ社会人大学院生である点は特筆すべきであろう。それを反映して、受講動機は、大学教員のキャリアを志向しているというよりも、現在の職業での必要性を挙げる受講生が複数いた。

5. 「教授法入門」の学習成果

全プログラムの学習成果からは、2023年度の試行版からの改善が図れたことがわかる。シラバス作成の前に他大学のシラバスを自分で探して読む課題を追加したり、個人メンタリングを行ったりしたことで、提出されたシラバスの質は全体に高かった。到達目標の記述や授業概要の書き方に顕著な改善がみられる。また、模擬授業についても事前にループリクを提示することでポイントをおさええた実施がされていた。

授業後のアンケートでは、満足度は100%という結果となった。他の大学院生と学び合えたことや自分で模擬授業を実践できたことが高い評価に結びついたことが自由記述からわかる。

6. 「教授法入門」の展望

現在は来年度の英語版での開講を予定しており、共同で担当する教員と準備を進めている。また、来年度から運用されるG S I制度のもと、本授業で学んだ大学院生が授業の一部を担うことが予定されている。G S Iへのヒアリングを通じ、「教授法入門」をより実践的な内容に洗練していくことが望まれる。加えて、大学教員のキャリアを目指さない受講者が一定数存在することを鑑みた内容の見直しも必要であろう。最後に複数大学での連携という選択肢も検討されるべきである。各大学の教育資源が限られている中、授業等の共通化を図ることが1つの選択肢となる。プレFDも共通化の対象として捉えるべきかもしれない。